

『南山神学』34号(2011年3月) pp. 63-91

## 「分離した魂は全ての自然的なるものを 知性認識することができるか」

トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第十八問題  
翻訳と註

井上 淳

第十八問題では<sup>1</sup>、〔身体から〕分離した魂は全ての自然的なるもの (omnia

---

<sup>1</sup> 本訳はいわゆる Leonina 版、すなわち、B. C. Bazan ed., *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita*, Tomus XXIV-1, *Quaestiones Disputatae de Anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996) を底本とし、註の多くもこの版に依拠した。しかし次の二つの版も常に参照し、Leonina 版と異なる場合にはそれを註記した。ただし綴りの違いなどの、さほど重要ではないと思われる異同については一々註記しなかった: James H. Robb, ed., *St. Thomas Aquinas Quaestiones de Anima* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1968); M. Calcaterra and T.S. Centi ed., *Quaestio Disputata de Anima in Quaestiones Disputatae*, vol. 2, 10<sup>th</sup> edition (Turin: Marietti, 1965)。以降 Robb 版および Marietti 版と略記する。また、翻訳にあたっては、以下の現代語訳を参照した。John P. Rowan, *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas' De Anima* (St. Louis: Herder Book Co., 1951); St. Thomas Aquinas, *Questions on the Soul*, trans. James H. Robb (Milwaukee: Marquette University Press, 1984); Saint Thomas d'Aquin, *Questions disputées de l'âme*, introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier (Paris: L'Harmattan, 2001)。以降 Rowan 訳、Robb 訳、および Vernier 訳と略記する。Rowan 訳は Marietti 版による翻訳、Robb 訳は本人の校訂版による翻訳、Vernier 訳は Leonina 版による翻訳である。

なお、本稿で用いるトマス・アクィナスの著作とその略号は次の通りである。*Quaestiones disputatae de anima* (QDA), *Quaestiones disputatae de ueritate* (QDV), *Summa theologiae* (ST)。テキストは全て Leonina 版を用いた。

QDA, q. 18 の主な平行箇所は ST I, q. 89, a. 3; *Summa contra Gentiles* II, c. 101; QDV, q. 8, a. 4 である。このうち ST I, q. 89, a. 2 には次の邦訳がある: 大鹿一正訳『神学大全』6 (1969年, 創文社)。また, QDV, q. 8, a. 4 には次の邦訳がある: 山本耕平訳「天使の認識について (真理論 第8問題)」『人間文化研究所紀要』第12号 (聖カタリナ大学人間文化研究所, 2007年)。

naturalia) を知性認識するのか否かが問われる<sup>2</sup>。そして〔その答は〕否であるようにも思われる<sup>3</sup>。なぜなら、

### 【異論】

- (1) アウグスティヌスが言っているように<sup>4</sup>、悪霊たちでさえ多くのことを長い時間の経験 (experientia) を通して知るのであるが、まさにその経験というものを、魂は〔身体から〕分離するとたちまち持たなくなるのである<sup>5</sup>。さて、ディオニシウスが『神名論』第四節に述べているように<sup>6</sup>、悪霊たち

<sup>2</sup> トマスがここで論じている「自然的なるもの」(naturalia) とは何か。「自然的なるもの」とはトマスにおいて「超自然的なるもの」に対比されて用いられる語である。たとえば *ST I, q. 58, a. 5* においてトマスは天使の知性に偽ということが存在しうるか否かについて論じているが、その主文に次のように述べている。「天使たちにおいて『無知』が存在するのは、『自然的本性的に認識されることがら』 *naturalia cognoscibilia* に関してではなく、『超自然的なそれ』 *supernaturalia cognoscibilia* に関してにほかならない」(日下昭夫訳『神学大全』4, 創文社, 1973年)。トマスが本項で論じている「自然的なるもの」も同様に、超自然的な仕方、すなわち至福者たちに与えられる栄光の認識によって知られるものと対比された意味で、分離後に魂が「自然本性的な仕方認識しうるもの」を指していると思われる。そして、この後の第二十問題において取り扱われる個物の認識とは異なり、ここでは、可知的認識 *cognitio intelligibilis* の対象、すなわち、人間知性が自然本性的に与えられた力で知り得る限りの事物の何性や本質についての認識について、それらの全てを魂が分離後に認識できるようになるのか否かが論じられているのである。

<sup>3</sup> 問いの進め方が、平行箇所 *ST I, q. 89, a. 3* とは逆になっている。すなわち、*ST I, q. 89, a. 3* においては、分離した魂は全ての自然的なるものを「認識できるとも考えられる」という仕方論が進められているのに対して、ここでは逆に、「知性認識できないとも考えられる」という仕方論が進められているのである。ただしトマスの立場そのものは一貫している。

<sup>4</sup> *Augustinus, De divinatione daemonum* 『悪霊の予言』3, 7 (PL 40, 584)。この見解は *ST I, q. 89, a. 3, s.c. 1* においてはイシドルスに帰されている: 「然るに悪霊も必ずしもすべての自然的なるものを認識するわけではなく、彼らは、イシドルスによれば、長期にわたる経験によって多くのことを学んでゆくのである」(大鹿一正訳)。Cf. *Isidorus Hispalensis, Sententiarum libri tres*, 1, 10, 17 (PL 83, 556C)。

<sup>5</sup> Cf. *ST I, q. 54, a. 5, cor.*: 「我々のうちに経験が存するのは、我々が感覚を通して個々 *singularia* を認識するかぎりにおいてである」(日下昭夫訳)。

<sup>6</sup> *Pseudo-Dionysius, De Divinis nominibus*, 4, 23 (PG 3, 735C): 「彼ら〔悪魔たち〕に与えられた善のすべてが変化したわけではない。むしろ彼らが与えられた全体的善から頹落したの

に与えられた自然的な賜物は彼らの内に明るく澄んだまま残っているのであるから<sup>7</sup>、悪霊は魂よりもより明敏な知性を有している。それ故、分離した魂は全ての自然的なるものを認識しないように思われる。

- (2) 更に。魂は身体と合一している間は、全ての自然的なるものを認識しない。従って、もし身体から分離した魂が全ての自然的なるものを認識するのだとすれば、そのような知識を魂は分離後に得るのだと思われる。ところが、いくつかの魂はこの世の生において、いくつかの自然的なるものの知識を獲得している。それ故、それらの魂は分離後に、一つはこの世において得た知識、もう一つは分離後に得る知識というように、同じ事物についての二種類の知識を持つということになる。しかし、それは不可能だと思われる。なぜなら、同一の種に属する二つの形相が同一の基体の内に存在することはできないからである<sup>8</sup>。
- (3) 更に。有限な力はどれも決して無限なるものに対応できない<sup>9</sup>。しかるに、分離した魂の力は有限である。なぜなら、その本質が有限なのであるから。

である。彼らに与えられた天賦的賜物に変化したとは、我々は決していうつもりはない。その賜物は完璧で、隅々まで輝いている」熊田陽一郎訳『キリスト教神秘主義著作集』第1巻（教文館、1992年）。

<sup>7</sup> Cf. ST I, q. 64, a. 1: 「これら三種の認識のうち、第一のもの〔自然本性によって得られる認識〕は、悪霊たちにおいて取り去られていないし、減ぜられてもいない。この認識は、すなわち、天使そのものに伴うものなのであり、天使はその本性よりして或る種の知性 *intellectus* 乃至は精神 *mens* たるのである。〔中略〕かくして、自然的な認識が彼らにおいて減ぜられているというごときことはないのである」日下昭夫訳『神学大全』4（創文社、1973年）。

<sup>8</sup> Cf. ST I, q. 89, a. 5, arg. 3: 「分離された魂は神の光の流入によって知識を持つことになる。もし、それゆえ、この世で獲得された知識が分離された魂のうちに存続するとするならば、一つの種に属する二つの形相が同一の基体のうちに存することとなるであろう。これは不可能なことからである」（大鹿一正訳）。また、次の箇所を参照。ST I-II, q. 51, a. 4, arg. 3: 「というのも、同一基体のうちに同一種類の二つの形相が存在することは不可能だからである」稲垣良典訳『神学大全』11（創文社、1987年）；ST III, q. 72, a. 7, arg. 3: 「同一の種に属する二つの形相が同じ基体のうちに在ることはできない」稲垣良典訳『神学大全』42（創文社、2003年）。

<sup>9</sup> Aristoteles, *Physica*, 266a 25.

従って、分離した魂の力は無限なるものに対応することはできない。ところが、知性認識される自然的なるものは無限である。というのも、その数や形や割合の種は無限なのだからである。それ故、分離した魂は全ての自然的なるものを認識するのではない。

- (4) 更に。認識は全て、認識する者と認識されるものとの類似化 (*assimilatio*) によって成る<sup>10</sup>。しかるに、分離した魂は非質料的なものなのであり、自然的なるものは質料的なものなのであるから、分離した魂が自然的なるものに類似化されることは不可能であるように思われる。それ故、分離した魂が自然的なるものを認識することは不可能であるように思われる。
- (5) 更に。可能知性の可知的なるものの秩序 (*ordo*) における在り方は、第一質料の可感的なるものの秩序における在り方と同様である。しかるに、第一質料は、一つの秩序づけについて唯一つの形相だけしか受け取ることができない。それ故、分離した可能知性も、感覚によって多種多様なものへと惹かれることがない以上、一つの秩序づけしか持たないのであるから、唯一つの可知的形相だけしか受け取ることができないように思われる。かくして、[分離した魂は] 全ての自然的なるものを認識できるのではなく、唯一つの自然的なるものだけを認識できるのである。
- (6) 更に。それぞれ異なる種に属するところのものは、種的に同じ一つの似たものとなることはできない。しかるに、認識は種的形象の類似化によって成る<sup>11</sup>。それ故、一人の分離した魂が全ての自然的なるものを認識するこ

---

<sup>10</sup> Cf. *QDV*, q. 1, a. 1, cor.: 「さて、認識は総じて認識者が認識事象に類同化されることによって成立するから、いうところの『類同化』が認識の原因をなす」花井一典訳『真理論』(哲学書房, 1990年); *QDV*, q. 8, a. 8, cor.: 「全ての認識は類似化によって成る」(山本耕平訳); *ST I*, q. 85, a. 2, ad 1: 「『知性認識されうるもの』が『知性認識するもの』においてあるのは、その似姿によってである。現実態における『知性認識されるもの』は現実態における『知性』であるといわれるのもこうした意味、つまり、ちょうど可感的事物の似姿が現実態における感覚の形相であるごとく、知性認識される事物の似姿が知性の形相にほかならないという意味においてなのである」(大鹿一正訳)。

<sup>11</sup> 本項第4異論を参照。

とはできない。なぜなら、それらのものは種的に多様なのであるから。

- (7) 更に。もし分離した魂が全ての自然的なるものを認識するのであれば、当然自らの内に自然的諸事物の似姿 (*similitudines*) である諸形相を持たなくてはならない。しかしそれらの似姿は、類と種だけに関するものであるか、あるいは個体に関するものでもあるかのいずれかである。もし類と種だけに関するものであるならば、分離した魂は諸々の個体を認識しないということになり、その帰結として、全ての自然的なるものを認識するのではないことになる。というのも、自然において存在するのは何よりもまず諸々の個体であると思われるからである。また、もし個体に関するものでもあるならば、個体の数は無限なのであるから、分離した魂の内に無限の数の似姿が存在するということになるが、それは不可能であるように思われる。それ故、分離した魂は全ての自然的なるものを認識するのではない。
- (8) ところが〔この論に対して〕、分離した魂の内にあるのは類と種の似姿のみであるが、それらを諸々の個体に適用することによって、分離した魂は個体を認識することができるのだという意見があった<sup>12</sup>。——それに対する反論。知性は自らの内に所有している普遍的な認識を、自分がすでに知っている個別的なもの以外には適用することができない。たとえば、もし私が全ての雌ラバが不妊性であることを知っているとしても、私はこの知識を、私が知っている個別的なこの雌ラバ以外には適用することができないのである。個別的なものの認識は、自然本性的に<sup>13</sup>、普遍的なるものの個別的なるものへの適用に先立つ<sup>14</sup>。なぜなら、このような適用は個別的な

<sup>12</sup> この一文を Leonina 版と Marietti 版はこのように第 8 異論の冒頭に置いているが、Robb 版は第 7 異論の末尾に置き、*Sed contra* から第 8 異論としている。

<sup>13</sup> Leonina 版は *naturaliter*、Robb 版と Marietti 版は *naturalem*。

<sup>14</sup> Cf. *ST I, q. 14, a. 11, cor.*: 「或るものを他のものに適用するためには、そのものをあらかじめ知っていなければならない。ゆえにこの適用なるものは、個物認識の根拠たりえず、却って個物の認識を前提しているのである」山田晶訳『世界の名著 トマス・アクィナス』(中央公論社、1975 年)。

ものの認識の原因になり得ないからである。個別的なものは、従って、分離した魂にとって知られないものとして残るであろう。

- (9) 更に。認識のあるところにはどこにでも、認識する者の認識されるものへの何らかの秩序づけが存在する。しかるに、断罪された者たちの魂は何の秩序も有していない。というのも『ヨブ記』第十章に、そこ、すなわち地獄には何の秩序も存在せず、永久の恐怖が住んでいると述べられているからである<sup>15</sup>。それ故、少なくとも断罪された者たちの魂は自然的なるものを認識していない<sup>16</sup>。
- (10) 更に。アウグスティヌスは『死者たちのための配慮』において<sup>17</sup>、死者たちの魂は、この世で生じることを全く知ることができない場所にいると言っている<sup>18</sup>。しかるに、自然的なるものは、この世において生じるものである。それ故、死者たちの魂は自然的なるものの認識を持たないのである。
- (11) 更に。可能態にあるものは全て、現実態にあるところのものによって現実態へと導かれる。しかるに、人間の魂は、身体と合一している間、自然的な仕方でも知り得るもの全てに対して、あるいはその大部分に対して<sup>19</sup>、可能態にあるということは明らかである。なぜなら、全てのものを現実態において知っているのではないからである。それ故、もし〔身体からの〕分離後に魂が全ての自然的なるものを知るのであれば、それは当然何らかのものによって現実態へと導かれるはずである。そのようなものとは、能動知性に他ならないと思われる。と言うのも『デ・アニマ』第三巻におい

<sup>15</sup> *Liber Job*, 10, 22: "... ubi umbra mortis et nullus ordo, sed sempiternus horror inhabitat."

<sup>16</sup> Leonina 版は *cognoscunt* (現在形), Robb 版と Marietti 版は *cognoscent* (未来形)。

<sup>17</sup> Augustinus, *De cura pro mortuis agenda*, 13-15 (PL 40, 604-606)。

<sup>18</sup> Laonina 版は *anime mortuorum* の後に *ibi sunt ubi* を加えた読みを採っている: *anime mortuorum ibi sunt ubi ea que hic fiunt omnino scire non possunt*. (イタリックの強調は筆者)

<sup>19</sup> Leonina 版は *plurium eorum*, Robb 版と Marietti 版は *plurimorum*。

て<sup>20</sup>、あらゆるものは能動知性によって〔現実態において可知的なるものに〕なると言われているからである<sup>21</sup>。しかしながら、まだ知性認識していない全ての可知的なるものに対しては、〔魂は〕能動知性によって現実態へと導かれ得ない。というのも、哲学者（アリストテレス）は『デ・アニマ』第三巻において<sup>22</sup>、能動知性を光に、表象像を色になぞらえているのであり、光は、色もそこに現存しない限り、いかなる可視的なるものに対しても、それを現実態において見られるものとなすことはできない。それ故、能動知性もまた、いかなる可知的なるものに対しても、可能知性を現実態にすることができないであろう。なぜなら、分離した魂には表象像が現存し得ないからである。表象像は身体的諸器官の中だけにしか存在しないのであるから<sup>23</sup>。

- (12) ところが〔この論に対して〕、自然的な仕方では知り得る全てのものに対して、〔魂は〕能動知性によってではなく、何らかの上位の実体によって現実態へと導かれるのであるという意見があった<sup>24</sup>。——それに対する反論。或るものが自らの類には属さない外部のものによって現実態へと導かれる場合は全て、その現実態化は自然的なものではない。例えば、もし治癒され得る或るものが医療技術とか神の力とかによって治癒されるならば、その治癒は医療技術による治癒とか奇跡的な治癒とかなのであって、自然的な治癒ではないであろう。治癒が内在的の根源によって生じるのでなければ、それは自然的な治癒とは言えないのである。さて、人間の可能知性に対し

<sup>20</sup> Aristoteles, *De anima*, III, 430a15.

<sup>21</sup> Leonina 版と Marietti 版は *facere*, Robb 版は *fieri*. Cf. *In De anima*, Liber III, cap. IV, Leonina, p. 218, u. 20-22: “. . . et alius intellectus sit ad hoc quod possit *omnia* intelligibilia *facere* in actu (qui uocatur intellectus agens).”

<sup>22</sup> Aristoteles, *De anima*, III, 430a14-17.

<sup>23</sup> Leonina 版と Robb 版は *cum non sint nisi in organis corporeis*, Marietti 版は *cum sint in organis corporeis*.

<sup>24</sup> この一文を Leonina 版と Marietti 版はこのように第 12 異論の冒頭に置いているが、Robb 版は第 11 異論の末尾に置き、*Sed contra* からを第 12 異論としている。

て固有かつ生来の作動者は、能動知性である。それ故、もし可能知性が能動知性によってではなく、何らかの上位の作動者によって現実態へと導かれるのだとすれば、それは我々が今論じている意味での自然的な認識ではないであろう。そしてその帰結として、全ての分離した魂がそのような認識を持つわけではないということになるであろう。というのも、ただ自然的な事柄においてのみ、全ての分離した魂は一致するのだからである。

(13) 更に。もし分離した魂が自然的な仕方では知ることができる全てのものに対して現実態に導かれるのだとすれば、それは神によってであるか、天使によってであるかのどちらかである。しかるに、天使によってではないように思われる。なぜなら、天使は魂の自然本性それ自体の原因ではないからである。それ故、魂の自然的な認識もまた、天使の作用によるものではないように思われるのである。一方、断罪された者たちの魂が、全ての自然的なるものを認識するという、かくも大きな完全性を、死後に神から受け取るということもまた、理にかなっていないように思われる。それ故、いかなる仕方においても、分離した魂が全ての自然的なるものを認識することはないと思われる。

(14) 更に。可能態において存在しているあらゆるものにとって最高の完全性とは、それが可能態においてある全てのことに対して現実態となることである。しかるに、人間の可能知性が自然的に可能態であるのは、全ての自然的に可知的なるものに対して、すなわち自然的な認識によって知られ得る事柄に対してのみである。それ故、もし分離した魂が全ての自然的なるものを知性認識するのだとすれば、分離した魂は全て、分離というそのことだけで、自分の最高の完全性、すなわち幸福を得るということになる。そうすると、もし身体からの分離だけで魂にこうした完全性が達成できるのならば、幸福に至るためになされる他の諸々の補助 (*adminicula*) は全て無駄であることになる。これは不条理であるように思われる。



- (15) 更に。知識には喜びが伴う。それ故、もし全ての分離した魂が全ての自然的なるものを認識するのだとしたら、断罪された者たちの魂は、この上ない喜びを味わっているように思われる。これは不条理であるように思われる。
- (16) 更に。『イザヤ書』の「アブラハムは私たちを知らなかった」<sup>25</sup>という言葉について『注釈』は、「死者たちは、たとえ聖人でも、生者たちが何をしているのか、彼ら自身の子供のことさえも、何をしているのか知らない」と述べている<sup>26</sup>。しかるに、この世において生者たちの間で行われている事柄は自然的な事柄である。それ故、分離した魂は全ての自然的なるものを認識するわけではないのである。

#### 【反対異論】

- (1) しかし反対に。分離した魂は離在的諸実体を知性認識する。しかるに、離在的諸実体の内には全ての自然的なるものの形象が存在する。それ故、分離した魂は全ての自然的なるものを認識する。
- (2) ところが〔この論に対して〕、離在的実体を見る者が必ずしも必然的に、離在的実体の知性の内に在る全ての形象を見るというわけではあるまいという意見があった<sup>27</sup>。——それに対する反論。グレゴリウスは次のように言っている。「全てを見ている方を見ている者たちが見ていないものとは一体

<sup>25</sup> *Isaias*, 63, 16.

<sup>26</sup> *Glossa interlinearis* (行間注釈)。Cf. *Biblia Latina cum Glossa Ordinaria*, Facsimile Reprint of the Editio Princeps Adolph Rusch of Strassburg 1480/81 (Turnhout: Brepols, 1992) III, p. 92b. 出典はアウグスティヌスの『死者たちのための配慮』(*De cura pro mortuis agenda*) 16 (PL 40, 606)。トマスは同じ注釈を *QDV*, q. 9, a. 6, arg. 5 および *STL*, q. 89, a. 8, cor. でも引用している。なお、『注釈』については、山田晶訳著『世界の名著 トマス・アキナス』(中央公論社, 1975年) 259頁, 註7および, Roy J. Deferrari, *A Lexicon of St. Thomas Aquinas* (Washington, DC: The Catholic University of America Press, Press, 1948), s.v. “Glossa” を参照。

<sup>27</sup> この一文を Leonina 版と Marietti 版はこのように第2反対異論の冒頭に置いているが、Robb 版は第1反対異論の末尾に置き、*Sed contra* から第2反対異論としている。

何か？」<sup>28</sup>。従って、神を見ている者たちは神が見ている〔全ての〕ものを見ているのである<sup>29</sup>。それ故、同じ理由から、天使たちを見ている者たちは天使たちが見ている〔全ての〕ものを見ているのである。

- (3) 更に。分離した魂は離在的実体を、それが可知的なるものである限りにおいて認識する。というのも、分離した魂は身体的な視覚によって離在的実体を見るのではないからである。しかるに、離在的実体が可知的なるものであるのと同様、その知性の内に存在している形象も可知的なるものである。それ故、分離した魂は離在的実体のみならず、その内に存在している可知的諸形象をも知性認識するのである。
- (4) 更に。現実態において知性認識されているものは、知性認識している者の形相なのであり、知性認識している者と一つである<sup>30</sup>。それ故、もし分離した魂が全ての自然的なるものを知性認識している離在的実体を知性認識するのであれば、分離した魂自身も全ての自然的なるものを知性認識するように思われる。
- (5) 更に。『デ・アニマ』第三巻に述べられているように<sup>31</sup>、より高尚な可知的なるものを知性認識する者は、それより劣る可知的なるものをも知性認識する。従って、もし分離した魂が、先に述べられたように<sup>32</sup>、最高度に可知的なるものである離在的諸実体を知性認識するのならば<sup>33</sup>、分離した魂

<sup>28</sup> Gregorius magnus, *Dialogus*, IV, 33 (PL 77, 376): “Quia enim illic omnes communi claritate Deum conspiciunt, quid est quod ibi nesciant, ubi scientem omnia sciunt.” Cf. Thomas, *QDV*, q. 8, a. 4, arg. 8; *QDV*, q. 2, a. 2, cor.

<sup>29</sup> Leonina 版は *vident ea que Deus uidet*, Robb 版は *vident omnia quae Deus videt*, Marietti 版は *vident omnia ea quae Deus videt*.

<sup>30</sup> Cf. Aristoteles, *De anima*, III, 430a3-5: 「質料なしにあるものどもにおいては、思惟するものと思惟されるものとは同一である」; 431a1: 「現実態にある知識は事物と同一である」。山本光雄訳『靈魂論』(アリストテレス全集 6, 岩波書店, 1968 年)。

<sup>31</sup> Aristoteles, *De anima*, III, 429b3-4. Leonina 版と Marietti 版は *ut dicitur in III De anima* だが、Robb 版は *ut dicitur* の後に *etiam* を挿入する読みを採っている。

<sup>32</sup> *QDA*, q. 17, cor.

<sup>33</sup> Leonina 版と Marietti 版は *maxime intelligibilia*, Robb 版は *maxime intelligibiles*.

はその他全ての可知的なるものを知性認識する、ということが帰結するよう  
に思われる。

- (6) 更に。もし何かが多く的事柄に対して可能態にある場合、それは、それら  
全ての事柄を現実態において有している能動者 (actiuum) によって<sup>34</sup>、そ  
れら全ての事柄に対して現実態へと導かれる。例えば、熱さと乾燥に対し  
て可能態にある物質は、火によって、現実態において熱いものとなり、ま  
た乾燥したものとなる。さて、分離した魂の可能知性は全ての可知的なる  
ものに対して可能態にある。しかるに、分離した魂がそこから流入  
(influentia) を受け取るところの能動者、すなわち離在的実体は、それら  
全ての可知的なるものに対して現実態にある。それ故、離在的実体は魂を、  
全ての可知的なるものに対して可能態から現実態へと導くか、あるいは全  
く導かないかのどちらかである。しかし明らかに、全く導かないことはな  
い。なぜなら、分離した魂は、この世では知性認識しなかったものをも含  
め、諸々の事柄を知性認識するからである。従って、離在的実体は全ての  
可知的なるものに対して魂を現実態へと導くのである。それ故、分離した  
魂は全ての自然的なるものを知性認識する。
- (7) 更に。ディオニシウスは『神名論』第五章において、存在者において上位  
のものは下位のものの範型であると言っている<sup>35</sup>。しかるに、離在的諸実  
体は自然的な諸事物よりも上位である。従って、離在的諸実体は自然的諸  
事物の範型である。それ故、分離した魂は離在的諸実体を見ることによ  
って、全ての自然的なるものを認識するよう思われる。

---

<sup>34</sup> Leonina 版は *ab actiuo quod habet omnia illa in actu*, Robb 版は *per aliquid quod est actu omnia illa*, Marietti 版は *ab activo, quod est actu omnia illa*.

<sup>35</sup> Pseudo-Dionysius Areopagita, *De divinis nominibus*, 5, 9: 「ここでもし哲学者クレメンスが、存在者のなかのより高貴なものを、或る意味での範型だといったとすれば、それはこの名辞のもつ本来の意味、完全で単純な意味から出た言葉とは思われない」(熊田陽一郎訳)。Cf. Thomas, *QDV*, q. 8, a. 8, arg. 1: 「ところで、『神名論』5章 (§9) において、存在者において上位のものは下位のものの範型である、と語ったクレメンスの見解が引用されている」(山本耕平訳)。

- (8) 更に。分離した魂は流入した諸形象によって認識する。しかるに、流入した諸形象は宇宙の秩序の諸形相であると言われている<sup>36</sup>。それ故、分離した魂は宇宙の秩序全体を認識するのであり、従って、全ての自然的なるものを認識するのである。
- (9) 更に。下位の本性の内に在るものは何であれ、その全てが上位の本性の内に在る。しかるに、分離した魂は自然的諸事物よりも上位のものである。従って、自然的なるものの全ては何らかの仕方であれ魂の内に在る。しかるに、魂は自分自身を認識する。それ故、魂は全ての自然的なるものを認識するのである。
- (10) 更に。グレゴリウスが言っているように<sup>37</sup>、『ルカによる福音書』十六章においてラザロと金持ちの男について語られていることは<sup>38</sup>、たとえ話ではなく実話である。そのことは、人物が〔ラザロという〕固有名詞で言い表されていることから明らかである。しかるに、そこには、陰府（よみ）に

---

<sup>36</sup> Cf. *QDV*, q. 19, a. 2, cor.: 「離在的魂は二様の仕方であれ認識する。一つは分離されるそのときに、自らに注ぎ込まれる形象によって認識する。〔中略〕第一の仕方に関しては天使の認識に類似した認識が離在的魂に帰せられるべきである。それ故、天使たちが、自らと一緒に創造された形象によって個別的なものを認識するように、魂も分離されるまさにそのときに自らに賦与された形象によって認識するのである。即ち、神の精神のうちに存在するイデアは形相と質料の両者に関して作出しうるものであるから、それらイデアは形相と質料の両者に即して諸事物の範型であり、類似でなければならぬ。それ故、それらイデアによって事物は形相的な諸根源に関連して取られる類と種との本性によってのみならず、質料がその根源である事物の個別性によっても認識されるのである。ところが、天使の精神と同時に創造される形相と魂が身体から分離されるときに獲得する形相は神の精神のうちに在る、かのイデアの諸理念に何らか類似したものである。従って、それらイデアから事物は形相と質料のうちに自存するために流出してくるようになり、形相に関しても質料に関しても、即ち普遍的本性に関しても個別の本性に関しても諸事物を認識しうる被造の精神のうちに形象が流出するのである。従って、このような形象によって離在的魂は個別的なものを認識するのである」山本耕平訳『聖カタリナ女子大学 研究紀要』第15号（2003年）。

<sup>37</sup> Leonina 版の註によれば（p. 156, adnotatio ad u. 225）、これは実はアンブロジウスの言葉である。Cf. Ambrosius, *Expositio Evangelii secundum Lucam*, 8, 13: “Narratio magis quam parabola videtur, quando etiam nomen exprimitur.” (PL 15, 1768D).

<sup>38</sup> *Evangelium secundum Lucam*, 16, 19-31.

置かれた金持ちの男が、以前に認識したことがないアブラハムを認識したと述べられている。従って、同様に、分離した魂は、たとえ断罪された者たちの魂であっても、この世においては認識しなかった事物を認識するのである。それ故、分離した魂は全ての自然的なるものを認識できるように思われる。

### 【解答】

解答。次のように言わなければならない。分離した魂は全ての自然的なるものを知性認識するが、それはある限られた意味において (*secundum quid*) であり、無条件的に (*simpliciter*) ではない。このことを明らかにするために次のことを考察しなければならない。事物相互の間の秩序においては、下位の本性において見出されるようなものなら何であれ、上位の本性においても<sup>39</sup>、より優れた仕方で見出される。例えば、この生成消滅する〔地上の諸物体〕において存在するものは、天の諸物体においては、より高貴な仕方、すなわち普遍的な因として存在するのである<sup>40</sup>。例えば、熱さや冷たさ、その他こういったものは、これら下位の諸物体においては個々の質とか形相という仕方では存在しているが、天の諸物体においては、これら下位の諸物体の質や形相がそこから由来する、ある普遍的な力として存在している。同様にまた、物的な本性の内に存在するものは何であれ、知性的な本性の内に、より卓越した仕方では存在する。なぜなら、物的な諸事物の形相は、質料的で個別的な仕方では物的な諸事物の内に存在しているが、知性的な諸実体の内には、非質料的で普遍的な仕方では存在しているからである。『原因論』に、知性実体は全て形相に満ちてい

<sup>39</sup> Leonina 版では *inueniantur* の後に *etiam* が置かれている。

<sup>40</sup> Cf. *ST I*, q. 115, a. 3, ad 2: 「だからして、我々は当然、『生成消滅論』第二巻におけるアリストテレスに従い、『その現在と不在によって、下界の諸物体の生成消滅をめぐる多岐多様 *varietas* を原因するとき、何らかの可動的な能動的根源』を指定することを要する。そしてこのようなものが諸々の天体なのである」横山哲夫訳『神学大全』8 (創文社, 1987年)。

る<sup>41</sup>、と述べられているのはこのためである。しかし更に言えば、全被造界の内に存在しているものは何であれ、より卓越した仕方でも神ご自身の内に存在している。というのも、事物の形相と本性はそれぞれの被造物の内に多様な仕方、そして区分された仕方でも存在しているが、神の内には単純な仕方、そして一なる仕方でも存在しているからである<sup>42</sup>。

事物のこの三つの仕方の存在は、『創世記』第一章で<sup>43</sup>、事物の創造において三つの仕方でも表現されることによって描かれている<sup>44</sup>。すなわち、アウグスティヌスが解説しているように<sup>45</sup>、第一に神は「大空あれ」(Fiat firmamentum)と仰せになった。これによって、神の御言葉の内における事物の存在が意味さ

<sup>41</sup> *Liber de causis*, IX (X), 92: “Omnis intelligentia plena est formis.”

<sup>42</sup> Cf. *QDV*, q. 8, a. 10, ad 3: 「同様の仕方でも神の本質は万物の固有の理念である。というのは、神の本質のうちに全ての被造物のうちに分割されて見いだされるものすべてのものが、一つの形相の仕方でも先在しているからである」(山本耕平訳)。

<sup>43</sup> *Genesis*, 1, 6-7.

<sup>44</sup> Leonina 版と Robb 版は *Et istud triplex esse rerum designatur*, *Genesis I*, per hoc quod in productione rerum tripliciter exprimitur, Marietti は短く *Et istud esse rerum tripliciter exprimitur*.

<sup>45</sup> *Augustinus, De Genesi ad litteram*, 2, 8, 16: 「大空の創造には三つの次元がある。まず父より生まれた叡知の次元としてはこの創造は神の言葉のうちにあり、つづいて霊的被造物のうちに、つまり天使の認識のうちにあり。これは天使のうちにある被造的な叡知の次元である。つづいて大空はその固有の類において、大空という被造物としてあるように事実に創られたのである。」『アウグスティヌス著作集 16「創世記逐語注解」』片柳栄一訳(教文館, 1994年)。

しかしながら、アウグスティヌスは同じ箇所にも述べており、言葉の解釈がトマスとは少々異なっている。*De Genesi ad litteram*, 2, 8, 19: 「その他の事物が創造された時、『神は「成れ」と言われた』(dixit Deus: Fiat)と語られるのをわれわれは聞くのであるが、この場合聖書は、神の言葉の永遠性について言及しようと意図しているとわれわれは解する。これに対して、『そのようになった』(Et sic factum)との聖書の言葉を聞く時、われわれは創られるべき被造物の、神の言葉のうちにある理拠についての認識が、叡知的被造物のうちで生じたことと解する。つまりその他の被造物は、この叡知的被造物の本性のうちで、ある種の仕方でも創造されたのである。すなわちこれら他の被造物が創られるべきであることを、神の言葉そのもののうちでまず一種の予感によって、叡知的被造物は認識したのであり、その後、『神は創造された』(Fecit Deus)と繰り返し言われるのを聞く時、われわれはその被造物そのものが、その類に従って生じたことと解する」(片柳栄一訳。ただし括弧内のラテン語は筆者)。

れている。第二に「そして神は大空を造られた」(Et fecit Deus firmamentum)と述べられている。これによって、天使の知性実体の内における事物の存在が意味されている。第三に「そしてそのようになった」(Et factum est ita)と述べられている。これによって、大空の固有の自然本性における存在が意味されているのである。その他の事物に関しても同様である。つまり、ちょうど事物が神の英知から流出した結果、その固有の自然本性において存立したのと同様に<sup>46</sup>、事物の諸形相が神の英知から知性的諸実体の内へと流出し、その諸形相によって知性的諸実体は事物を知性認識したのである<sup>47</sup>。

それ故、次のことを考えなくてはならない。ものは、どのような仕方でも自然的な完全性に関して在るかという、その仕方に即して可知的完全性 (perfectio intelligibilis) を持つ<sup>48</sup>。というのも、それぞれの個体が自然的な完全性に関して在るのは、それ自身の故にではない。他のことの故に、すなわち<sup>49</sup>、自然が意図している形象がそれらの個体の内に保持されているが故にである。例えば、自然は人間を生むことを意図するのであって、個体としてのこの人を生むこと

<sup>46</sup> Leonina 版は *Sicut enim a deo profluxerunt res a diuina sapientia ut in propria natura subsisterent*, Robb 版は *Sicut enim a Deo profluxerunt res a divina sapientia ut in propria natura subsisterent*, Marietti 版は *Sicut enim a Deo profluxerunt res, ut in propria natura subsisterent*. (イタリックの強調は筆者)。

<sup>47</sup> Cf. QDV, q. 8, a. 11, cor.: 「ところで、自然物は神の知性からそれらの形相と質料に即して、両者から存在することへと流出するように、天使の知性の形相はそれら両者を認識するために流出してくる」(山本耕平訳)。

<sup>48</sup> Cf. ST I, q. 55, a. 2, cor.: 「このことはまた、かかる実体のありかた *modus essendi* そのものからも明らかに見られる。けだし、下位の霊の実体、つまり魂には、それが身体の形相たるかぎり、身体に近接した存在 *esse* が属しているものであり、だからして、魂というものには、そのありかたそのものに基づいてこうしたことが、つまり身体によって、また身体を通じて自らの可知的完成 *perfectio intelligibilis* に到達するということが適合する。事実、さもなくば、魂が身体と一つになっていることは無意味であることになる。上位の諸実体、すなわち天使は、これに対して、身体という物体から全面的に独立であり、非質料的 *inmaterialiter* な仕方でも、つまり可知的な存在 *esse intelligibile* において、自存している。だからして、彼らが自らの可知的完成に到達するのは、可知的な流出 *intelligibilis effluxus* によるほかはないのであって、つまり彼らは、こうした仕方でも、その知性的本性と同時に、認識される事物の形象をも、神から取得したのである」(日下昭夫訳)。

<sup>49</sup> Leonina 版と Robb 版にはないが、Marietti 版は *ut* の前に *scilicet* を置いている。

を意図しているわけではない。ただし<sup>50</sup>、この人という個体なしに人間というものは存在し得ないという意味で、個体としてのこの人を生むという場合は別である。哲学者（アリストテレス）が『動物発生論』の中で<sup>51</sup>、あたかも種に属するものだけが自然の意図によるものであるかのように、種の偶有性の原因を指し示す場合には我々はそれを目的因に帰すべきだが、しかし個物の偶有性の原因については作動因と質料因に帰すべきである、と言っているのはこのためである。従って、諸事物の種を認識することは可知的完全性に属することであるが、諸々の個物を認識することは、たまたま付帯的にそうである場合を除いて、可知的完全性に属することではない<sup>52</sup>。

この可知的完全性は全ての知性的実体に見られるものではあるが、しかし同一の仕方ではない。というのも、上位の知性的諸実体において諸事物の可知的形相は、より単一的であり、より普遍的であるが、下位の知性的諸実体においては、それらが第一の単一にして唯一なる方<sup>53</sup>から遠ざかれば遠ざかるほど、そして質料的事物の個別性に近づけば近づくほど<sup>54</sup>、より多数化され、より低次に普遍的である。ところがしかし、上位の諸実体においては知性的な力がより強力なために、彼らは少数の普遍的な形相によって、自然的諸事物を最後の種（*ultima species*）に至るまで認識するほどの可知的完全性を有しているの

<sup>50</sup> Leonina 版と Robb 版は *nisi in quantum*, Marietti 版は *nam in quantum*.

<sup>51</sup> Aristoteles, *De generatione animalium*, 778a29-b1.

<sup>52</sup> Cf. *QDV*, q. 2, a. 6, cor.: 「我々の知性は、自体的に語れば、個物を認識しないで、普遍のみを認識することが帰結する。というのは、形相は全て形相たる限り、普遍的であるからである。〔中略〕しかし、付帯的には我々の知性は、個物を認識することが可能である。というのは、哲学者が『デ・アニマ』第3巻（12章、431a14）に語る通り、表象像は我々の知性に対して、可感的なものが感覚に対するように関係しているからである。例えば、魂の外にある色が視覚に対するようにあるのである。それ故、感覚のうちにある形象が事物そのものから抽象され、その形象によって知性の認識は何らかの仕方では表象像に接続されるのである」山本耕平訳『人間文化研究所紀要』第13号（2008年、聖カタリナ大学人間文化研究所）。

<sup>53</sup> すなわち、神。

<sup>54</sup> Leonina 版は *ad particularitatem materialium rerum*, Robb 版と Marietti 版は *ad particularitatem rerum*.



である。下位の諸実体はしかし、より劣った知性的な力しか持たないために、もしも上位の諸実体の内にあるのと同じほどに普遍的な諸形相が下位の諸実体の内にあったのだとしたら、下位の諸実体はそのような諸形相によっては、それ以上分割できない種 (*indivisibiles species*) に至るまで事物を認識するほどの究極的な可知的完全性に達することはなく、彼らの認識はいわば普遍的で混雑したもの (*cognitio in quadam uniuersalitate et confusione*)、すなわち不完全な認識に属するものにとどまったであろう。知性が強力であればあるほど、少ないものから多くのことを得ることができるということは明らかである。その証拠に、未熟な者たちや理解の遅い者たちには、一つ一つ全てのことを説明しなければならず、また個々の事柄についてそれぞれ個別の例を挙げなければならないのである<sup>55</sup>。

さて、人間の魂があらゆる知性的諸実体の中で最下位であることは明らかである。それ故、その自然的な受容能力は、質料的諸事物から適合的な仕方でも事物の形相を受け取るためのものである。人間の魂が身体と合一しているのはそのためなのであり、質料的諸事物から可能知性に即して可知的諸形象を受け取ることができるためである。魂は、このような限定された諸形相に即して可知的認識において完成されるために必要である以上の、知性認識のための自然的な力を持っていないのである。従って、魂が分有している能動知性と呼ばれる知性認識の光もまた、このような種類の可知的諸形象を現実態にするためのはたらきを持っている。

それ故、魂は、身体と合一している間は<sup>56</sup>、まさにその身体との合一の結果として下位のものへと向かう視野を持つのであり、その下位のものから自らの

---

<sup>55</sup> Cf. *ST I*, q. 55, a. 3, cor.: 「我々人間の間においても、何らかの意味での実例が看取されうる。一方では、すなわち、個別的に一つ一つについて説明されるのでないかぎりには可知的な真理を認識することのできないようなひとびともあるのであって、これは彼らの知性の薄弱なるに起因する。しかし他方では、もっと強力な知性を持ち、少数のものに基づいて多数のものを把えうるような、そうしたひとびとも存在しているのである」(日下昭夫訳)。

<sup>56</sup> Leonina 版と Robb 版は *Quamdiu*, Marietti 版は *Quoniam*。

知性的な力に釣り合った可知的諸形象を受け取り、この仕方では知識において完成されるのである。しかしながら、身体から分離されると、今度は上位のもののみに向かう視野を持つことになり、上位のものから普遍的な可知的諸形象の流入を受け取る。しかしながら、それらの形象は上位の諸実体におけるよりも低次に普遍的な仕方では魂の内に受け取られるにもかかわらず、魂の知性的な力は、このような種類の可知的諸形象によって完全な認識へと、すなわち個々のものを個別的にまた明確に知性認識することによる認識へと達するためには不十分であり、魂はいわば普遍的で混雑した仕方では、つまり諸事物が普遍的諸原理において (*in principiis uniuersalibus*) 認識されるような仕方では、事物を認識するにすぎないのである<sup>57</sup>。そして、このような認識を、分離した魂は流入という仕方では全部一度に手に入れるのであって、オリゲネスが主張しているように教導という仕方では継次的に手に入れるわけではない<sup>58</sup>。

従って、分離した魂は、自然的な認識によって、全ての自然的なるものを普遍的な仕方では認識するのであり、それぞれのものを個別的な仕方では認識するのではない、と言わなければならない。ただし、聖なる者たちの魂が恩寵によって有する認識に関しては話が別である。なぜなら、その認識に関する限り、彼

---

<sup>57</sup> Cf. ST I, q. 86, a. 2, ad 2: 「我々の知性は種的形象 *species* を表象から抽象することによって認識するという本性を有している。それゆえ、ひとはその表象したことのないようなそうした数とか図形とかの種 *species* を現実的に認識することもできないし、能力態的にそれらを認識しているということもありえない。ただし、類 *genus* においてとかその普遍的な根源的諸要素 *principia uniuersalia* においてそれは可能だともいうのならば別であるが。しかしこうした認識は、可能態における混雑した認識ではない」 (大鹿一正訳)。

<sup>58</sup> Origenes, *De principiis*, I, 6, 3 (PG 11, 169): 「即ち、ある者は最初の代に、またある者は次の代に、またある者は終りの時に復帰する。それも大きな重い罰、それだけでなく、長い期間にわたる、あえて言うなら、多くの代々に渡る荒々しい苦罰を通してもどされる。まず初めに天使たちから教育を受け、次いで上位の霊たちの教育を受けて、というように、各々の階級を通してより上位へと進み、ついには見えない永遠のものにまで至るが、〔その間に〕天上の霊たちそれぞれの職務によるそれぞれの教育を通して行くのである」小高毅訳『諸原理について』(創文社、1978年)。

らは天使と等しき者とされているのであり、御言葉 (Verbum) <sup>59</sup> の内に全てを見ているからである<sup>60</sup>。

それ故、〔異論と反対異論の〕両方の異論に対して次のように答えなければならない<sup>61</sup>。

### 【異論への解答】

- (1) 第1の論に対しては次のように言わなければならない。アウグスティヌスによれば<sup>62</sup>、悪霊たちは三つの仕方でも物事を認識する<sup>63</sup>。あるものを彼らは善い天使たちの啓示によって認識する。それはすなわち、キリストと教会の神秘などのような、自然的な認識を超えるもののものである。また、あ

<sup>59</sup> Cf. *ST I*, q. 34, a. 2, cor.: 「『御言』ということが神において固有な仕方でも語られる場合、それはペルソナ的に解されるのであり、それは御子のペルソナに固有の名称である」； q. 34, a. 3, cor.: 「御言のうちには、被造物に対する関聯がふくまれている。ただし、神は、自らを認識することによって、すべての被造物を認識する。〔中略〕神は一つのはたらしきによって自らと万物とを知性認識するのであるから、神の単一なる御言は、単に御父を表現するのみでなく、さらに、もろもろの被造物をも表現する。そしてちょうど、神の知は、神に関しては単にそれを認識するのみであるが、被造物に関しては単にそれを認識するのみだけでなく更にまたそれを造るものでもあるごとく、同様に、神の御言も、御父なる神のうちにあるものに関しては、単にこれを表現するのみであるが、被造物に関しては、これを表現するとともに、またこれを造るものなのである。このゆえに、『詩篇』第三十二篇（第九節）には、『神が語りたまうた、そして万物はつくられた』とある。すなわち、御言のうちには、神のつくる諸々の事物の『創成の根拠』 *ratio factiva* がふくまれているのである」山田晶訳『神学大全』3（創文社、1987年）。

<sup>60</sup> Cf. *QDV*, q. 8, a. 11, ad 12: 「栄光のうちにある聖なる人々は、この地上でなされていることがらを御言のうちには認識している」（山本耕平訳）； *ST I*, q. 89, a. 8, cor.: 「やはり然し、グレゴリウスの所説のごとく、神を見る聖者たちの魂は此の世でおこなわれているあらゆる現在のことがらを認識するということのほうがほんとうのようである。ただし、彼らは天使に等しきものなのであって、天使についてはアウグスティヌスも、生者のもとでおこなわれていることがらを彼らが知らないことはありえないと確言しているのである」（大鹿一正訳）。

<sup>61</sup> Leonina 版と Robb 版は *ad utrasque obiectiones*, Marietti 版は *ad obiectiones*.

<sup>62</sup> Augustinus, *De divinatione daemonum* 『悪霊の予言』 3, 7 (PL 40, 584)。上の註 4 を参照。

<sup>63</sup> Cf. Isidorus Hispalensis, *Sententiarum libri tres*, 1, 10, 17 (PL 83, 556C): “Triplici enim modo praesentiae acumine vigent, id est, subtilitate naturae, experientia temporum, revelatione superiorum.”

るものを彼らは彼ら自身の知性の明敏さによって認識する。それはすなわち、自然的な仕方では知られ得ることがらである。そして、あるものを彼らは長い時間の経験を通して認識する。それはすなわち、個別的なことがらにおける未来の非必然的な出来事のことである。このようなことがらは、すでに述べたように<sup>64</sup>、知知的な認識 (*cognitio intelligibilis*) には自体的に属していない<sup>65</sup>。つまり、それらについて今ここで論じられているのではない<sup>66</sup>。

- (2) 第2の論に対しては次のように言わなければならない。この世において知ることのできるいくつかの自然的なるものの知識を獲得した魂の内には、この世において知ったそれらのものの個別的に明確な認識があるであろう<sup>67</sup>。しかしながら、それ以外のものの認識は普遍的で混雑したものであろう。それ故、[この世において] 知識を獲得しておくことは魂にとって無益ではないであろう。また、知ることができることがらの両方の種類の知識が同じ一つの魂に存在することに何ら支障はない。なぜなら、これら二つの知識は同一の性格 (*ratio*) のものではないからである<sup>68</sup>。
- (3) 第3の論に対しては次のように言わなければならない。その理論は今我々が論じていることには当てはまらない。なぜなら、我々は分離した魂が全

<sup>64</sup> 本項主文 u. 271-87 を参照。

<sup>65</sup> Cf. *ST I*, q. 14, a. 13, ad 3: 「我々によって学的に知られるところのものは、それ自体におけるかぎりにおいてもやはり必然的であるときことがらたることを必要とする。それ自体において未来的で非必然的であるときことがらは、すなわち、我々によって知識 *scire* されることはできないのである」高田三郎訳『神学大全』2 (創文社, 1984年)。

<sup>66</sup> Cf. *ST I*, q. 89, a. 3, ad 3 (ad 1 in contrarium): 「イシドルスの語っているのは未来のことがらの認識についてであって、これは、天使も悪霊も分離された魂も、やはりこれをその因において認識するか或いは神の啓示 *revelatio divina* を通じて認識するか以外には認識しえない。これに対して、我々の語っているのは自然的なるものの認識についてなのである」(大鹿一正訳)。

<sup>67</sup> Cf. *ST I*, q. 55, a. 3, arg. 2: 「普遍的に認識されるところのものよりも個別的に認識されるところのものの方が、より完全な仕方では認識される」(日下昭夫訳)。

<sup>68</sup> Cf. *ST I*, q. 89, a. 5, ad 3: 「これら二つの知識は決して一つの性格のものではない。だから如何なる不都合も帰結するわけではない」(大鹿一正訳)。

ての自然的なるものを個別的に認識すると主張しているわけではないからである。それ故、数や形や割合における種の無限性は、魂の認識と矛盾しない。しかし<sup>69</sup>、この理論が同じ仕方で天使の認識に対する異議に用いられる可能性があるので、次のことを述べておかなければならない。すなわち、数や形などの種が無限であるのは、現実的にそうなのではなく、可能的にそうであるに過ぎない<sup>70</sup>。しかも、有限な知性的実体の力がこうした無限なるものへと達することには全く支障がない。なぜなら、知性的な力もまた、質料によって制限を受けないという点で、ある意味無限なのだからである。だから、それは普遍を認識することができる。普遍とは、理念的に無限なるものを可能的に包含しているという点で、ある意味無限なのである。

- (4) 第4の論に対しては次のように言わなければならない。質料的事物の形相は、非質料的な仕方で非質料的諸実体の内にある。それ故、両者の間における類似化は、形相的側面に関する限りにおいて生じるのであり、存在の仕方に係る限りにおいて生じるのではない<sup>71</sup>。
- (5) 第5の論に対しては次のように言わなければならない。第一質料が諸形相に対して関係づけられる仕方は二通りしかない。すなわち、純粋な可能態において在るか、純粋な現実態において在るかのどちらかである。なぜな

<sup>69</sup> Leonina 版と Marietti 版は *tamen*、Robb 版は *cum*。

<sup>70</sup> Cf. *ST I*, q. 7, a. 4, cor.: 「しかるに多の種は、数の種にもとづいて成立する。しかるにいかなる数の種も無限ではない。いかなる数も、一を尺度としそれによって測られた多であるからである。それゆえ、無限の多が現実的に存在するという事は、自体的な仕方にせよ附帯的な仕方にせよ、不可能である。〔中略〕しかしながら、無限の多が可能的に存在することはできる。そもそも多の増大は、大きさが分割されることに伴って起こる。じつさい物が分割されればされるほど、その結果として多数のものが生じてくるのである」(山田晶訳)。

<sup>71</sup> Cf. *QDV*, q. 10, a. 4, ad 4: 「精神のうちには形相は非質料的なものしか存在しないけれども、しかし質料的事物の類似は存在することができる。というのは、類似と類似がそのものであるその当のものが同じ存在を持っている必要はなく、可知的性格においてそれらは一致していればよいのである」山本耕平訳『人間文化研究所紀要』第7号(聖カタリナ女子大学人間文化研究所, 2002年)。

ら、本性的諸形相 (*forme naturales*) は、何か障碍があるのでない限りは、質料の中に在るや否や直ちに自らのはたらきを持つからである。その理由は、本性的形相は唯一つのものに対してしか関係づけられないからである。それ故、火の形相が質料の内に在ると直ちに、その質料を上方へと動かしめるのである。ところが、可能知性は可知的諸形象に対し、三通りの仕方に関係づけられる。すなわち、ある場合には、学習する前のごとく、それらの形象に対し、純粋な可能態において在る<sup>72</sup>。またある場合には、実際に考察をしている時のごとく、純粋な現実態において在る。しかし、ある場合には、現実態においてではなく能力態 (*habitus*) において知識が在る時のごとく、可能態と現実態の間の中間的な仕方である<sup>73</sup>。それ故、知性認識的形相 (*forma intellectiua*) が<sup>74</sup>、本性的形相が第一質料に対して関係づけられるのと同じ仕方でも可能知性に対して関係づけられるのは、その形相が現実態において知性認識されている限りにおいてであって、能力態において在る限りにおいてなのではない<sup>75</sup>。従って、第一質料が一度に同時には唯一つの形相にしか形相づけられないのと同じく、知性もまた<sup>76</sup>、[一度に同時には] 唯一つの可知的なるものしか知性認識しない。しかしながら、能力態的には (*habitualiter*)、多くのものを知ることができる。

(6) 第6の論に対しては次のように言わなければならない。ものは二通りの仕

<sup>72</sup> Leonina 版は *se habet ad eas in potentia pura*, Robb 版と Marietti 版は *se habet in potentia pura*.

<sup>73</sup> Cf. *ST I*, q. 87, a. 2, cor.: 「能力態は、純粋な可能態と純粋な現実態との或る意味における中間に位する」(大鹿一正訳) ; *ST I-II*, q. 50, a. 4, ad 2: 「可感的なる存在 *esse sensibilis* への可能態が形体的なる質料に属することく、可知的なる存在 *esse intelligibile* への可能態が可能的知性に属する。したがって、純粋なる可能態 *pura potentia* と完全な現実態 *actus perfectus* との中間たるところの習慣 (*habitus*) が、可能的知性のうちに見出されることを妨げるものは何もない」(稲垣良典訳)。ただし括弧内のラテン語は筆者。

<sup>74</sup> Leonina 版は *forma intellectiua*, Robb 版と Marietti 版は *forma intellecta*.

<sup>75</sup> Leonina 版と Marietti 版は *est habitualiter*, Robb 版は *inest habitualiter*.

<sup>76</sup> Leonina 版と Robb 版は *intellectus*, Marietti 版は *intellectus possibilis*.

方で、認識している実体に類似化され得る。一つは、自らの自然本性的存在 (*esse naturale*) に即してである。この仕方においては、種的に異なるものが認識している実体に類似化されることはできない。なぜなら、この実体は唯一つの種に属しているからである。もう一つは、可知的存在 (*esse intelligibile*) に即してである。この仕方であれば、認識している実体が諸々の異なる可知的な種的形象を有していることに即して、種的に異なるものが、認識している実体に類似化され得るのである<sup>77</sup>。

- (7) 第7の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂は種のみならず個物をも認識する。ただし、その全てをではなく、いくつかだけである。それ故、魂の内に無限の数の形象が存在している必要はない。
- (8) 第8の論に対しては次のように言わなければならない。普遍的な認識の個物への適用は、諸々の個物の認識の因なのではなく、むしろその認識に伴伴するところのものである<sup>78</sup>。分離した魂がどのような仕方で個物を認識するのかについては、後に論じられる<sup>79</sup>。

<sup>77</sup> Leonina 版には欠けているが、Robb 版と Marietti 版には、この後に次の句がある: “cum tamen ipsa sit unius speciei.” (この実体が唯一つの種に属しているにもかかわらず)。

<sup>78</sup> Cf. *QDV*, q. 2, a. 6, arg. 3: 「しかし、我々の知性は、普遍的形相を何らかの個物に適用する限りで、個々の事物を認識する、という主張があった。——これに対しては次のように言われる。我々の知性は或るものを別のものに適用しうるのは、両者を予め認識している場合だけである。それ故、個物の認識は普遍を個物に適用することに先行しているのである。それ故、前述の適用は、何故我々の知性は個々の事物を認識するのか、の原因ではありえないのである」 山本耕平訳『人間文化研究所紀要』第13号 (聖カタリナ大学人間文化研究所, 2008年)。この異論に対するトマスの答えは次の通りである。*QDV*, q. 2, a. 6, ad 3: 「人間は個物を想像力と感覚によって認識する。従って、知性のうちにある普遍的な認識を特殊なものに適用することができる。というのは、固有に言えば、感覚と知性が認識するのではなく、人間が両者によって認識することは、『デ・アニマ』第1巻 (10章, 408b11) に明らかな通りである」 (山本耕平訳)。また、トマスは別の箇所にも次のように述べている。*QDV*, q. 8, a. 11, cor.: 「或る事物が別の事物に適用されうるのは、その他のものが何らかの仕方でもより先に既に認識されている場合だけである。例えば、我々は我々の普遍的な認識を、我々の感覚的な認識に先行している個的な事物に適用することができる」 (山本耕平訳)。

<sup>79</sup> 分離した魂における個物の認識については、*QDA*, q. 20 で論じられている。

- (9) 第9の論に対しては次のように言わなければならない。アウグスティヌスが『善の本性』において述べているように<sup>80</sup>、善は、限度、形象、秩序において成り立つのであるから、ある事物の内にとれほどの秩序が見出されるのかは、そこにどれほどの善が見出されるかということに比例する。しかるに、断罪された者たちの内には、恩寵の善はないものの、自然本性的な善はある。それ故、そこには、恩寵の秩序はないものの、自然本性的な秩序はあるのであり、その秩序は<sup>81</sup>、今論じているような認識のためには十分である。
- (10) 第10の論に対しては次のように言わなければならない。アウグスティヌスが語っているのは、この世で起きている個別的な事柄についてである。それらが可知的認識に属するものではないことについては、すでに述べられた<sup>82</sup>。
- (11) 第11の論に対しては次のように言わなければならない。可能知性は能動知性の光によるだけでは、全ての自然的なるものの現実態における認識へと導かれることはできない。全ての自然的なるものの認識を現実態において有している何らかの上位の实体によって導かれる必要がある。そして、正しく理解するなら、能動知性は、アリストテレスの教説では、直接的に可能知性に対して能動者（*actiuum*）であるわけではなく、むしろ、それが現実態において可知的なものにするところの表象像に対してなのである。この可知的なものとした表象像によって、可能知性は、身体との合一の

---

<sup>80</sup> Augustinus, *De natura boni*, 3: 「実際、すべてのものは、より大きな限度と形象と秩序を与えられているだけ、それだけ確かにより大きな善であり、より小さな限度と形象と秩序を与えられているだけ、それだけ小さな善である。したがって、これら三つのもの、すなわち限度、形象、秩序は、これら三つのものに属するとされる無数のものは措くとして、これら限度、形象、秩序の三つは、霊であれ物体であれ、神によって造られたものにおける、いわば一般的な善である」岡野昌雄訳「善の本性」『アウグスティヌス著作集 7 マニ教論駁集』（教文館、1979年）。

<sup>81</sup> Leonina 版と Marietti 版は *qui sufficit*, Robb 版は *quod sufficit*。

<sup>82</sup> 本項主文 u. 271-87 および第一異論解答を参照。



故にその視野が下位のものへと向けられる時に、現実態へと導かれるのである。同じ理由により、可能知性は、身体からの分離の故にその視野が上位のものへと向けられている時に<sup>83</sup>、上位の諸実体の内に在る現実態において可知的である諸形象によって、それが自らに固有の作動者であるような仕方、現実態とされるのである。それ故、このような仕方の認識は自然本性的なものである。

- (12) 第 12 の論に対する答えは、このことから明らかである。
- (13) 第 13 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂はこのような完全性を、天使たちを仲立ちとして神から受け取るのである。というのも、魂の実体は神によって無媒介的に造られたのであるが、可知的完全性は、ディオニシウスが『天上位階論』第四章に述べていることから明らかかなように<sup>84</sup>、ただ自然的な完全性のみならず、恩寵の神秘に属するものささえも、天使たちの仲介を通して、神によって魂の内に生じるからである<sup>85</sup>。
- (14) 第 14 の論に対しては次のように言わなければならない。知られ得る自然的なるものの普遍的な認識を有している分離した魂は、完全な仕方で現実態

<sup>83</sup> Leonina 版は *aspectus eius est ad superiora propter separationem*, Robb 版は *aspectus ejus inclinatur ad superiora propter separationem*, Marietti 版は *aspectus eius est ad superiora post separationem*. (イタリックは筆者)

<sup>84</sup> Pseudo-Dionysius Areopagita, *De caelesti hierarchia*, 4, 2: 「したがって、彼らは、第一にしかも多様な仕方、神に属するものを分有するのであり、第一にしかも多様な仕方、神性の根源の秘密を開示するのである。そこで、神性の根源の照明は彼らに対して最初に行われたのであり、われわれを超えている啓示は彼らを通してわれわれに伝えられたのであるから、彼らはどんなものよりも特に『使い』という名称に値するのである。かくて、神のことば〔聖書〕が述べているように、律法は天使たちを通してわれわれに与えられたのであり〔ガラ 3: 19〕、天使たちは、律法〔が与えられる〕以前もそれ以後も、われわれの誉れ高き教父たちを神に属する事柄へと引き上げ、あるいは、彼らになすべきことを教え、彼らを誤りと冒瀆の生から正しい真理の道へ向き直らせ、彼らにあるいは聖なる秩序を、あるいはこの世を越えた神秘の密かな直観を、あるいは神の予言を代弁者として開示するのである」今義博訳「天上位階論」『中世思想原典集成 3』（平凡社、1994 年）。

<sup>85</sup> Leonina 版は *proveniunt a Deo in animam mediantibus angelis*, Robb 版と Marietti 版は *proveniunt a Deo mediantibus angelis*. (イタリックは筆者)

とされているのではない。なぜなら、ものを普遍的な仕方では認識するとは、可能態において認識するという事だからである<sup>86</sup>。それ故、そのような魂は自然的な幸福にさえ達していない。従って、幸福に到達するための他の諸々の補助が余分なものであるということにはならないのである。

- (15) 第 15 の論に対しては次のように言わなければならない。断罪された者たちは、彼らが有する認識の優良さそれ自体の故に、悲しみを受けている。なぜなら、彼らは、彼らが他の諸々の善を通してそれへと秩序づけられている最高の善から、自分たちが引き離されているのだということを、鮮明に認識するからである。
- (16) 第 16 の論に対しては次のように言わなければならない。『注釈』のその言葉は個々のことがらについて述べているのであり、それらのことがらは、すでに述べたように<sup>87</sup>、知覚的完全性に属するものではないのである<sup>88</sup>。

### 【反対異論への解答】

- (1) 次に、反対の立場から出されている第 1 の論に対しては<sup>89</sup>、次のように言わなければならない。分離した魂は離在的実体を完全な仕方では把握するわけではない。それ故、分離した魂が離在的実体の内に似姿として存在する全てのものを認識する、とするべきではない。
- (2) 第 2 の論に対しては次のように言わなければならない。グレゴリウスの言

<sup>86</sup> Leonina 版は *cognoscere in potentia*, Robb 版は *cognoscere imperfecte*, Marietti 版は *cognoscere imperfecte et in potentia*. 可能態における認識が不完全な認識であることについては、上の註 57 を参照。

<sup>87</sup> 本項主文 u. 271-87 および第一異論解答と第十異論解答を参照。

<sup>88</sup> Cf. *QDV*, q. 9, a. 6, ad 5: 「アウグスティヌスは魂が有する自然本性的認識について語っている。この認識によっては、聖人たちにさえこの地上で起こることを認識することはできない。しかし、彼らはこれらの出来事を彼らが受けた栄光の力によって認識することができる」山本耕平訳『人間文化研究所紀要』第 12 号（聖カタリナ大学人間文化研究所、2007 年）。

<sup>89</sup> Leonina 版は *Ad primum uero eorum que in contrarium obiciuntur*, Robb 版と Marietti 版は *Ad primum uero in contrarium*. (イタリックは筆者)

葉は、神という可知的対象の力に関する限り<sup>90</sup>、真実である。神ご自身は全ての可知的なるものを表出しておられるのであるから<sup>91</sup>。しかしながら、神を見る者は誰でも神が知っておられるあらゆることを知る、とすべきではない<sup>92</sup>。その者が、神ご自身をご自分を把握されているのと同じように神を把握できるのでない限りは<sup>93</sup>。

- (3) 第3の論に対しては次のように言わなければならない。天使の知性の内に在る諸形象は、それらがその者の形相であるところの知性に対して可知的なのであって<sup>94</sup>、分離した魂に対して可知的なわけではない<sup>95</sup>。
- (4) 第4の論に対しては次のように言わなければならない。たしかに知性認識されているものは知性認識する者の形相であるが、だからといって、離在的実体を知性認識している分離した魂が、その離在的実体が知性認識しているものを知性認識する、とすべきではない。なぜなら、分離した魂は離在的実体を把握している (*comprehendit*) わけではないからである<sup>96</sup>。

---

<sup>90</sup> Leonina 版と Robb 版は *ad virtutem*, Marietti 版は *ad cognitionem*.

<sup>91</sup> 上の註 59 を参照。

<sup>92</sup> Cf. *QDV*, q. 8, a. 4, cor.: 「或る被造物が神の本質を見るとき、神が単純な直知の認識で知る全てのことを知る、といったことは不可能である」 (山本耕平訳)。

<sup>93</sup> Cf. *QDV*, q. 8, a. 4, ad 17: 「[最高度に可知的なるものである神を見ている知性は万物を見るとき] 異論の論拠は、もし知性が最高度に可知的なもの、即ち、神を完全に認識するならば妥当するであろう。しかし、そうしたことはないのであるから、異論は帰結しない」 (山本耕平訳)。なお、Leonina 版は *nisi comprehenderet ipsum sicut ipse se comprehendit*, Robb 版は *nisi comprehenderet ipsum sicut ipse se ipsum comprehendit*, Marietti 版は *nisi comprehendat ipsum, sicut ipse se ipsum comprehendit*.

<sup>94</sup> 上の註 10 を参照。

<sup>95</sup> Cf. *QDV*, q. 19, a. 1, cor.: 「以上の議論から、魂は死後三通りの仕方では知性認識する、と結論されうる。一つは魂が身体のうちにあつたときに諸事物から受け取った形象によって。もう一つは自らが身体から分離されたときに、神から自らに注ぎ込まれた形象によって。第三には、離在的諸実体を見ることによって、またそれら実体のうちに諸事物の形象を直視することによって。ところで、この最後のものは魂の決定力には服しておらず。離在実体の決定力に服している。じっさい、離在実体は語るときに自らの知性を開き、黙するときそれを閉じるからである」 (山本耕平訳)。

<sup>96</sup> Cf. *ST I*, q. 89, a. 2, cor.: 「分離された魂の実体の様態は天使の実体の様態よりは下位のものであり、他の分離された魂の様態とは相似である。だからして、それは他の分離された

- (5) 第5の論に対しては次のように言わなければならない。たしかに分離した魂はある仕方で離在的諸実体を認識できるのであるが、だからといって、他の全てのものを完全に認識できる、とするべきではない。なぜなら、分離した魂はそれらの離在的諸実体を完全な仕方では認識しているわけではないからである<sup>97</sup>。
- (6) 第6の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂は離在的実体によって、可知的な全ての自然的なるものに対して現実態へと導かれるが<sup>98</sup>、それは完全な仕方においてではなく、すでに述べたように<sup>99</sup>、普遍的な仕方において (*uniuersaliter*) である。
- (7) 第7の論に対しては次のように言わなければならない。たしかに離在的諸実体は、ある意味、全ての自然的事物の範型である<sup>100</sup>。しかし、だからといって、それらの離在的諸実体自体が完全に把握されるのでない限り、それらが認識されれば全てのものが知られる、ということは帰結しない。
- (8) 第8の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂は流入した諸形相によって認識するが、しかし、すでに述べたように<sup>101</sup>、これらの形相は、上位の諸実体の内に在るような個別的な仕方における宇宙の秩

---

魂については完全な認識を持つし。天使についてのその認識は不完全で不充分でしかない」(大鹿一正訳)。

<sup>97</sup> 上の註 96 を参照。

<sup>98</sup> Leonina 版は *anima separata reducitur a substantia superiori in actum omnium intelligibilium naturalium*, Robb 版は *anima separata reducitur a superiore in actum omnium intelligibilium*, Marietti 版は *anima separata reducitur a superiore in actum omnium intelligibilium naturalium*. (イタリックは筆者)

<sup>99</sup> 本項主文 u. 340-42, および異論解答 14 を参照。

<sup>100</sup> Cf. *QDV*, q. 8, a. 8, ad 1: 「ところで、神の本質はそれぞれの全ての事物の、その事物の個性性における、範型である。というのも、それはあらゆる事物の範型的イデアを含んでいるからである。同様に、天使の本質も天使が質料的事物について所有している形相の故に、それら事物のその個別性における類似である。もっとも、この形相は、神におけるイデアについて妥当するようには、天使の本質と同じというわけではない」(山本耕平訳)。

<sup>101</sup> 本項主文 u. 346-48 を参照。

序の諸形相 (*forme ordinis uniuersi in speciali*) なのではなく<sup>102</sup>, 一般的な仕方 (*in generali*) におけるものに過ぎないのである。

- (9) 第9の論に対しては次のように言わなければならない。自然的諸事物はある意味で、離在的諸実体の内にも、魂の内にも在る。しかしながら、離在的諸実体の内には現実態において在るのだが、魂の内には、知性認識されるべき全ての自然的形相に対して魂が可能態にあるということに即して<sup>103</sup>, 可能態において在るのである。
- (10) 第10の論に対しては次のように言わなければならない。アブラハムの魂は離在的実体であった。それ故、金持ちの男の魂は、他の離在的実体を認識するのと同じように、アブラハムの魂を認識することができたのである。

---

<sup>102</sup> Cf. *QDV*, q. 8, a. 11, cor.: 「それ故、第三の仕方が他の人々、即ち、天使たちは自らのうちに宇宙の全秩序の普遍的形相を有している、と主張する人々によって提案された。これら形相は天使たちに創造の瞬間に与えられ、彼らはそれら形相をこの個物とか、あの個物とかに適用するのである。従って、こうした仕方で天使たちは普遍的な諸形相から個々の事物を認識するのである」 (山本耕平訳)。

<sup>103</sup> Leonina 版と Robb 版は *in potentia, secundum quod est in potentia ad omnes formas*, Marietti 版は *in potentia ad omnes formas*. (イタリックは筆者)